聖霊降臨後第２４主日

「正気をとりもどした男」

サムエル記上１６：１３－２３

ルカ８：２６－３９

（１）

先週は、弟子たちがガリラヤ湖上で荒れ狂う嵐と出会った箇所でした。今朝は、外の世界から目を転じて、人間の内面に荒れ狂う嵐の世界です。

横浜の教会では、礼拝が終わると、昼食も忘れて二時・三時頃まで初心者会をしました。そうした者の中から、信仰に導かれる者が次々と与えられました。

ある時、背は高く、頭は角刈り、顔は日焼けした３０歳前後の男性が、礼拝後、求道者会に出席しました。その時、今となっては分かりませんが、どうしたことか、開いた聖書箇所は、その時はマルコ5章でしたが、「悪霊につかれた男」の箇所でした。

そこから、何をどう話したかは、今となっては分かりませんが、一時間近く話し終えた時ですー、「墓場で荒れ狂う男とは、自分のことではないですか」とご本人が言うのです。事前にその箇所は話すとは決めていませんでしたから、主に示され・導かれた聖書箇所としか言いようがありません。個人伝道をしていますと、こうしたことをしばしば経験してきました。彼はその後洗礼を受け、母親を信仰に導き、教会の中心的な働きをするようになりました。

ルカ福音書８章二十七節以下を見ますと、ゲラサの町にいた男が、墓場で日夜叫び声をあげていました。「悪霊につかれていた」とみなされています。いかにもひと昔前の見かたというかもしれません。しかし、そうとばかり言えません。むしろ、こうした異常な精神状態を、「悪霊につかれていた」と見なしていたことに注目しなければなりませえん。

一昔前、除霊の出来る「お助けばあさん」という祈祷師が身近にいました。青森県下北半島には「イタコ」という口寄せを行う巫女がいます。沖縄では「ユタ」という女性の霊媒者がいます。霊的世界はにぎやかです。以前、国会議員の宗教調査を行いましたら、議員の大半が何らかの信心を持っているとの統計が出ました。さもありなんと思われるのです。上に立って大きな仕事をしている人ほど、何かと縁起をかつぐものです。中には「除霊」・「厄払い」をする人がいるといいます。

既に亡くなりましたが、斎藤茂吉の息子ー茂太さんは精神科の医者でしたが、彼自身が重い躁鬱病患者でした。彼は精神的な病に効くという温泉があると、足繁く訪れたといいます。一つは山形県の「今神温泉」。いま一つは、宮城県の「定義温泉」。今神温泉では、ローソクに火に灯して祭壇に供え、念仏を唱え乍ら頭から湯を二十杯かけ、３６℃の冷泉に身を静めたといいます。湯船の脇を見ると、そこには、患者を鎖でつないだ跡があるとい

います。

オーストラリアの有名な精神科の医師「ヴィクトール・フランクル」は、「それぞれの時代に、その時代特有の精神的な病いが現われる」と言っています。現代社会では、「うつ病」とか「神経症」になるのでしょうか。

「病は気から」ということばがあります。悩み苦しみが心の病を引き起こすことが具体的に説明されているのが、『心療内科』（中公新書）という本です。一時、話題になった本があります。赦せない心や怒りを抱いている人が、バリウムを飲んで、レントゲンでお腹の部分を照射したら、小腸が捻転しているのです。昔から、「断腸の思い」、「はらわたが煮えくりかえる」などという言葉がありますが、そのままの状態です。まさしく悩みや怒りや不安という感情は、頭だけでなく、体と直結して、身全体に影響を与えます。さまざまな原因から起きる精神的な病は、これほどまで深く体全体に影響を与えているかと思いますと、今さらながら驚きます。ルカ８章二十七節のこの人の場合、自分自身ではどうにもコントロールできない荒ぶる力が彼の内を支配していました。それは、「二階にもう一人の自分」がいるような状態です。それが、ひどく彼を苦しめていました。

（２）

ルカ８章２６節に、「こうして彼らは、ガリラヤ湖の向こう側、ゲラサ人の地方に着いた」「向こう側」とは、エルサレムと反対側、つまり、ガリラヤ湖の東側にあたります。主イエスと弟子たちは、ガリラヤ湖を舟で渡っている時、突風に会いました。それから後、ゲラサ人の地に着いたのです。

その地方はデカポリス（十の町）と呼ばれ、ゲラサ人（ギリシャ人）が住んでいる地、ローマ帝国の直轄領でした。今日のシリア地方に当たりますが、ユダヤ人にとっては、異邦人の地、汚れた地、聖書の律法のいう不浄とみなされていた豚を飼っていた地でした。

なぜ、主イエスが「汚れた」とみなしていた異邦人の地を訪れたのかについて、何の説明もありません。しかし、ゲラサの地に足を踏み入れると、その町の「汚れた霊につかれている男」と出会います。この人について、マルコ福音書５章では、より詳しい説明があります。

「この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。これまでにも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた」（マルコ５：３－５）。

この異常な男から、福音書は何を語ろうとしているのでしょうか。三つのポイントを考えておきたいと思います。

第一のポイントは、彼が、「墓場を住まいとしていた」点です。墓地とはいいますが、日

本の墓地とはだいぶ違うようです。この地方の墓場は、石灰岩の「ほら穴」でした。墓の中は、じめじめしていません。人が住もうと思えば住めました。それで、彼は、「家に住まないで、墓場に住んでいた」のです。

社会的適応が出来るか否かにより、「異常」であるか「正常」であるかの判断基準となるといわれますが、着物も身に着けていない異常な様子ですから、ゲラサの町に住めず、墓場に住むしかなかったのでしょう。

第二のポイントは、「もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった」というのです。彼は鎖や足かせをつけられることを嫌い、鎖を断ち切ろうとしていました。自分をコントロールできない状態です。その全ての原因は、「汚れた霊」・「悪霊」によると見なされています。

現代の社会にも、同じような立場の人がいないとはいえません。それが、悪霊の働きかどうかはわかりませんが、何らかの抑圧を受けると、人は心を、精神を、病みはじめます。悪霊につかれたゲラサの男が、仮に病院で診察を受けたとすれば、おそらく統合失調症ー、（以前の精神分裂病）と診断されるかもしれません。この病気の発症率はかなり多く、妄想・幻覚・幻聴に捕らわれると治療の難しい病気です。それが自分を傷つけたり、他人まで傷つけたりするようになれば、強制的に入院させられます。精神病院の大半は閉鎖病棟です。治療と言うよりも隔離病棟のように思われます。日本で精神の病に苦しむ人々は、約１００万人ー、その内３０万の人が、一般の入院とは異なり、５年、１０年、さらには、２０年と入院期間が長くなります。しかも、治っても帰る所が無い方が多いようです。

人間のことを、ドイツ語では、「ミットライデン」ー、「ともに生きる」という言葉です。そこから「人間」・「ジンカン」という日本語が生まれたようです。それでは、人は孤立すると人間でなくなるというのでしょうか。時として、人間関係が妙にうっとうしく思われることがあります。出来ることなら、許されることなら、どこか、自分を支配し・縛りつけている「かせ」とか「きずな」などというものから解放されて、自由な身になりたいという密かな願望があります。

夏目漱石の「草枕」の冒頭には、「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」とありますが、しかし、だからといって、誰もがそうした生き方ができるわけではありません。勝手な生き方を選べば、最後は「ロクでなしの国に住むしかない」のであります。

しかし、これと反対のことも起きます。望んでもいないのに職場を突然に解雇されることがあります。職場を失いますと、社会の中で自分の居場所がなくなり、孤立し、孤独になります。そうした時、きわめて危うい精神状

態におちいります。普段は凶暴な振舞いなどとは、まるで縁のないと思われるおとなしい人が、突然、周囲の人々を無差別に殺傷した事件が、数年前に、東京秋葉原の路上で起きました。仕事を解雇され、交際していた女性との別れ話しが重なり、自分でも分らないまま、むやみに人を傷付けたくなる衝動が彼を襲ったというのです。まるで、活火山からマグマが噴出したかのようです。こうしたことは、何らかのキッカケがあれば、誰にでも起こりそうなことです。

第三のポイントは、この人が「昼も夜も、墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた」というのです。

人とのかかわりを失い、孤立していた彼は、昼夜なく、墓場や山で叫びつづけながら、自らの身体を傷つけながら、自暴自棄の叫びを挙げていました。しかし、こうしたゲラサの男を他人事として見たり、精神的異常者だからしょうがないと、見なすだけであってはならないのです。狂気は紙一重の差です。気づかないでいますが、今日までどれほど多くの人を傷つけてきたか、いえ、時に人に傷つけられて生きてきたか計りしれないのです。

もしかしたら、「墓場を住みかにしていた」この人は、かなりプライドの高い人であったかもしれません。この男とプライドは関係がないというかもしれません。しかし、果たしてそうでしょうか。「プライド」とは、悪性コロナのバイキンみたいなものです。肺の奥深くまで菌が入り込んで呼吸困難となります。

「プライド」とはそうしたもので、自分を守ろうとするあまり、相手を攻撃し、人との交わりをことごとく壊してしまい、ついには墓穴を掘ることになります。プライドが高ければ高いほど、他の人と共鳴・共存して生きることは難しくなり、ついには孤立するしかありません。墓場で悪霊につかれていた男を他人事と見なすことはできません。

（3）

主イエスがゲラサ人の地に足を踏み入れた時、汚れた霊にとりつかれていた男が真っ先に主イエスに走り寄りました。

「いと高き神の子イエスさま。俺にかまわないでくれ。後生だから、これ以上、俺を苦しめないでくれ」と叫びました。しかし、この叫びはこの男から出たものではなく、悪霊たちの叫びです。それで、主イエスは、おまえたちの名は何かと尋ねます。

「レギオンです」と答えたのです。「レギオン」とはローマの一軍団（5000人隊）を意味します。ゲラサの地は、ローマの占領地でした。沖縄の米軍基地に、「リージェント・クラブ」という米軍専用レストランがありました。

彼の内に深くに潜んでいた諸々の悪しき霊が叫びながら、「これ以上近づいて、俺を苦しめないでくれ」と主イエスに頼み込みます。

「レギオン」というのですから、それほど無数の悪しき霊が彼の内で暴れまくっていたの

でしょう。すると、主イエスは、「汚れた霊よ、この人から出て行け」と命じました。
すると悪霊どもは、「底知れぬ所にいけと命じないでください。自分たちを豚の中に潜り込ませてください」と願い出たのです。
そこで、主イエスがそう命じました。すると、「汚れた霊どもはこの人を出て、豚の中に入った。すると二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ」（マルコ５：１３）というのです。
豚の大群が、もうもうと砂を巻き上げながら、崖から地響きを立てて、湖になだれ込んでいく凄まじい光景を、この人は、決して忘れることは出来なかったはずです。
一人の男の内に潜んでいた「レギオン」という諸々の悪しき霊を追い出すのに、マルコ福音書によれば、二千匹ほどの豚が犠牲とされました。驚くべきことです。しかし、父なる神は、悪しき霊に捕らわれ、支配され、罪と死の法則に絡め捕らわれているわたしたちを贖い出し、自由の身として解放するために、二千匹の豚の犠牲どころではありません。はるかにまさる多くの犠牲を払って下さいました。
「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った」。
「あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。あなたがたはこのキリストによって、彼を死人の中からよみがえらせて、栄光をお与えになった神を信じる者となったのであります」。
私たちの心を支配している「レギオン」といわれているほどの諸々の悪しき霊から私たちを解放してくださるため、神は独り子を給うほどの犠牲を払って下さったのであります。
このことを心にとめておかねばなりません。
ところで、悪しき霊から解放されたこの人は、「着物を着て、正気に返って座っていた」（８：３５）とあります。主イエスに出会った時は、「これ以上かまわないでくれ」と自ら拒否していたのですが、今は「主イエスの足下に正気に返って座っていた」のです。
それで、この人は、「イエスさまにお従いしたい」と願い出たのです。ところが、主イエスは「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことを、ことごとく知らせなさい」と言われました。（マルコ５：１９）。
それで、この人は、「イエスが自分にしてくださったことを、ことごとくデカポリス地方に言い広め始めた」というのです。
こうして、主イエスは、墓場を住居としていた男を、ゲラサの町へと返しました。
今朝は、疎外されていた一人の男の回復を見ましたが、これは私たちにも生きる勇気を与えて下さいます。私たちの周りにも、様々

な抑圧の中で、人と顔を合わせることが出来ず、家に引きこもっている人がいます。安定した職業につけず将来に希望を失っている人がいます。心身の病気のために礼拝に出ることが出来ない人がいます。

汚れていた霊に捕らわれ、墓場で自分の身を傷つけていた男が、主イエスとお会いして正気となり、「主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい」という使命を与えられたのです。

人と人との関係を、あちこちで壊し、ダメにしてきたわたしたちでしたが、主イエスにお会いして、さっぱりと着物を身につけ、正気を取り戻らせていただいた者へと変えられたことを感謝したいと思います。

【祈ります】

天の父よ、もろもろの悪しき霊から解放してくださり、正気を取り戻らせて下さいましたことを感謝します。讃美と自由の霊をいただいたものとして、神と人とを愛するものとなさしめてください。主イエスの御名によって祈ります。「アーメン」。